

変わる国際援助とREI



USAIDについて

東西冷戦下、アメリカが1961年に設立 西側諸国を主導する覇権国として対外援助を展開
同年国連総会でケネディが1960年代を「開発の10年」と名づけ「東西」のみならず「南北」にも目を向ける先進国による途上国支援を国際目標とする
独立後のアジア・アフリカの開発ニーズに対応



1990年代冷戦終結後は「援助疲れ」からアメリカの援助学が減少
この時期高度成長を遂げ非軍事国際貢献策としてODA（政府の途上国援助）を拡大した日本が
世界最大の援助国に



2001年 多発テロ ブッシュは「テロの根源は貧困」だとし援助額を大幅に増やす。
以降アメリカは「世界最大の援助国」 2024年にはアメリカが世界の援助額の3割を占める



USAIDはアメリカの対外援助の中心的役割

60カ国以上に約1万人の職員

アフリカ、中南米、アジアで、民主化の支援、人道支援、健康分野に注力

2025年1月トランプ就任 業務が一時停止、7月1日に活動終了 8割以上の業務が廃止され、
残りは国務省に移管



アメリカ以外は

G7が中心的な担い手

アメリカは覇権国として民主主義や自由主義経済を広めてきたのに対し、イギリスやフランスは植民地から独立を果たした国々との関係を再構築するために援助を始めた国も。

対外援助の狙いや理念は国によって違う。



日本は

敗戦後の賠償を経て国際社会の復帰を果たしアジアをはじめ途上国の発展を支援する中、自らの経済的自立も果たす。



変わる援助のあり方

戦後80年。途上国への援助のあり方が大きく変わる中で起きたUSAIDの解体。

国際開発の構図が**大きく転換する時期**に起きた

これまでは先進国の国民の税金を原資とし、途上国との間に「**援助する・される**」という垂直的な関係

デジタル技術の普及により知識と経験が**双方向に行き交う相互学習・途上国発のイノベーションを促す時代**に

従来の「**援助**」から「**共創**」への発想転換が必要

新しい時代の「**国際協力**」の形を作る

これから必要なのは「**自立的発展**」、「**援助される立場から卒業**」してもらうこと

(ここまで 政策研究大学院大学 開発専門家 大野泉名誉教授)



これまでの支援の問題点

- 各国政府は資金の最も効果的な使い道を正確に把握できず、資金はコネのある人々へ流れる傾向がある。
- 援助はしばしば不適切なプロジェクトに投入され、経済成長を妨げる。
- 援助資金が「支援」ではなく「抑圧」の道具となることがある。
- 援助機関は受益者のニーズよりも、ドナー国の政治的・商業的利益を優先してしまう
 - 例：エジプトへの米国軍事援助は、現地支援よりも米国の軍需産業の利益に貢献していた。
- 過去40年間、米国の対外援助は「成果」ではなく「善意の意図」で正当化されてきた。
- 援助が成功した例は少なく、多くの場合、受け取った国の悪い統治や非効率を助長している。
- 結果として、援助は貧困や飢餓を解決するどころか、経済崩壊を悪化させることがある。
- 真の支援には、「自分たちがすべての答えを持っているわけではない」という謙虚さが必要。



改善方法

- 今後の援助は、官僚的でない「小さく柔軟な仕組み」へ転換すべき。
- 援助は（先進国）主導ではなく、**現地のニーズに即したパートナーシップ**に基づくべき。
- **公的資金（税金）**だけでなく、**民間の寄付**を活用する形に移行すべき。

(ここまで *It's Time to Reimagine Foreign Aid* 2025年3月19日付け New York Times)



- REIは、**スタッフ3名**から成る小さな団体です。ボランティアとインターンの力に支えられています。
- REIは、介入ではなく**現地の人々とのパートナーシップ**を重視し、地域の人材・スキル・資源を最大限に活かすことで持続可能な成果を生み出しています。
- REIは政府や大規模な国際機関の資金を受けず、**全て民間の企業、団体、個人のご支援**で運営されています。
- プロジェクト1件あたりの支援額は年間**最大25,000米ドル**（約380万円）です。
- 1979年の設立以来、20カ国以上で**820件超**のプロジェクトを支援し、**累計1,150万米ドル以上**、**約100万人**に支援を届けてきました。

プロジェクト1件あたりの支援額年間最大25,000米ドル（約380万円） ができること



レバノンのシリア避難民の子供向け幼稚園



ナイロビの職業訓練



タイ・ミャンマー国境の依存症治療



ミャンマーの母子健康指導



タイ・ミャンマーのリーダーシップ訓練



KSDCのAdvanced Courseを受講しているMaw Htee Moさん(19歳)は、現在、キャンプ内のKarenni Refugee Committeeでインターンとして活動しています。

「KSDCで学んだ経験を活かして、NUSDかKNCで学業を続けたいと思っています。」

彼女の向学心は、REIの支援が避難民の自立と成長という長期的な成果を生み出している証です。

「REIの支援は、私たちにとってとても効果的です。」

Maw Htee Moさんは、学びを通じてカレンニ族コミュニティの未来に貢献できるリーダーへと成長しています。



Saw Sumyat Htutさん(19歳)は、ミャンマーからの避難民です。

かつて彼は、アメリカ・カリフォルニアの大学で社会学を学ぶための奨学金を獲得していました。多様な背景を持つ人々とのコミュニケーションの仕方を学びたいという夢を抱いていたのです。

しかし、ミャンマーのクーデターと、その後の軍政権による強制徴兵制度の執行により、避難を余儀なくされました。

国境に到着後、REIが支援する「依存症治療センター」でケースワーカーとしての訓練を受け、現在は依存症に苦しむ人々の治療支援に従事しています。

「アメリカに行く夢は閉ざされてしまいましたが、ここでの仕事にはとても感謝しています。様々な背景や経験を持つ人と出会えるので、毎日が学びです。」

彼は笑顔でそう語ってくれました。

REIの今後

小さな団体だからこそ実現できる「ボトム・アップ支援」
この理念を守りながら、いかに影響力を拡大していくか

- まずは現在の5つのプロジェクトから10のプロジェクトへと支援規模を拡大することを目指します。
- そのためには、この理念に賛同してくださる企業・財団・団体・個人の支援者の輪を広げていく必要があります。
- 皆様からのご助言やご意見も、ぜひお聞かせください！
- これからもこの活動に全力で取り組んでまいります。引き続き、REIへのご支援をよろしくお願いいたします。

